ゼミの談話の接続表現

学籍番号　S15(漢字表記)
所属・学年

1. はじめに

私たちが普段話すとき、接続表現は重要な役割を果たす。「では」、「それでは」のように、議論を始めるときに用いられ、また、文章の区切りとなり、論理構造の理解を助ける役割も果たす。そのため、接続表現をテーマに様々な研究が行われている。その一つの例として講義での接続表現をあげられる。石黒(2010)は講義での接続表現には、様々な種類があり、その機能の一つとして講義の重要情報を表示する機能を持つと指摘する。このように研究の仕方の中でも、各場面での接続表現の機能について研究が行われている。選考研究の例の場合、講義で使われる接続表現の研究だった。この論文では、よりニッチなところにターゲットを絞ってゼミの談話においての接続表現を研究したい。

では、なぜゼミが研究対象で、この研究がどういう意義をもつのか。日本の大学の場合、ゼミに所属し、そこで発表や議論をすることが多い。しかし、ゼミでの接続表現についてあまり研究されていないことが現状だ。日常会話とはまた異なるゼミの談話の接続表現を分析することによって、ゼミの談話の性格、特徴の理解を高めることができるだろう。それは、特に、留学生にとって助けになることだと言える。多くの留学生の場合、ゼミという形態の議論に慣れていないため、この論文が留学生に手引になることを期待する。

2. 先行研究と本研究の位置付け

ゼミの談話における接続表現については、あまり研究がなされていない。関連のある研究として、講義の談話の接続表現がある。その先行研究としては、石黒圭の「講義の談話の接続表現」と、伊能裕晃の「講義理解の手がかりとしての接続表現 -受講ノートの分析による-」がある。

まず、「講義の談話の接続表現」では、講義での接続表現の使用状況を分析し、使用された接続表現がどういう機能をもつかについて書かれている。使用状況においては、11 の講義資料から分析した結果、総分数に対する接続表現の出現頻度は 36.9%であった。そして、講義の接続表現は、講義の構造を表示する機

能、講義の重要情報を表示する機能があるという。例えば、「つまり」の場合は重要情報を表示する接続表現として機能することが多く、先行文脈の要約が、「つまり」の次に叙述されるという。
一方、「講義理解の手がかりとしての接続表現 -受講ノートの分析による-」のでは、講義の接続表現の重要情報表示機能に焦点をあて、重要内容の手がかりとなる接続表現を特定し、それをさらに分析している。分析の結果、「じゃ、じゃあ」、「つまり」、「だから」、「それから」、「実は」の５種の接続表現が重要情報の手がかりとなる接続表現であり、同じ表現でも使う場所によって重要な役割を果たすものもあれば、そうでないものがあることを明らかにした。
この二つの研究を踏まえ、講義ではなく、ゼミの談話という新しい分野の研究を行う。日常会話ではなく、一人で話す講義ともまた異なるゼミという談話は、今まであまり研究が進んでいないことから、学術的価値が十分あると言えるだろう。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、某国立大学大学院の某ゼミの２回分のスクリプトを利用する。両方とも、構成員は異なるが、言語をテーマとする内容で、約８人の人が参加した。約４０分間、発表者と質問者が質疑応答する内容で構成されている。
このデータをもとに、「講義の談話の接続表現」の分析方法を倣い、どの接続表現が何回使われたのかを数え、市川(1978:89-93)の接続表現分類法を用いて分類する。これによって、どのタイの接続表現が何回の頻度で使われたのかが明確になる。つまり、ゼミの談話の定量的分析を行う。
そして、その接続表現がどういう機能をするかについて分析する。先行研究の石黒(2010)の場合、講義にその研究対象を絞って研究を行った。この論文では、ゼミの特殊性を十分生かし、質問者と発表者の接続表現にどういう違いが見られるか、なぜそういう違いが見られるかの原因を分析する。

4. 分析結果

分析結果を表で表したのが表１である。まず、「で」が質問者、発表者のどちらの場合においても最もよく使われていることがわかる。なぜ、このような現象が起きるのか。発表者の方は主に研究内容を発表しているのに対し、質問者の方はその内容について質問をする。しかし、どちらにしても一番よく使われる

接続表現は「で」だ。このような現象について、川端（）は「で」が場合によって異なる機能をする多様な使い方ができるからだと述べる。例えば、「で」は「ゆえに」、「したがって」のような順接の接続表現の代用としても使え、「ところで」のような逆接の代用としても使える。また、転換型の「ところで」、「さて」の代わりでも使える。このように、「で」は様々な意味で使えることのできるために、頻繁に使われるのが当たり前かもしれない。
一方、発表者が発表の時に、「で」の次によく使われる接続表現の類型は「添加型」だ。これは、発表者が発表するにあたって内容を展開するために用いられることが多い。接続表現を使わずに、ひたすら説明だけするよりは、接続表現を使った方が理解しやすいからだ。（講義との比較）
もう一つ注目すべきところは、質問者の方で逆接型の接続表現をよく使ったことだ。これは質問者がどういう意図をもって質問をしたのかをよく表してくれる。

表1：ゼミの談話における接続表現の使用頻度

類型	接続表現	発表者		質問者
		発表	質疑応答	質疑応答
順接型	（それ）で	27	7	20
	だから			3
	そうすると			2
	ということで			
	そのために			
	そこで	1		
添加型	それから	3		
	そして	4	1	
	まず	5	2	2
	また	2		
	つぎに	3		

	あとは	4	1	2
	最後には	1		
同列型	つまり			1
	たとえば			2
	あるいは			
	いずれにしても			
逆接型	でも	1	3	4
	ところが			
	それなのに			
	しかし	1		
	けど/けれども			1
転換型	では	3		2
補足型	ただし			
	というのは			1
対比型	それに対して	1		
	というか			

参考文献

市川孝(1978) 「国語教育のための文章論概説」教育出版 p. 89-93

石黒圭(2010) 「第７章 講義の談話の接続表現」佐久間編著 pp.138-152

伊能裕晃(2012)「講義理解の手がかりとしての接続表現 -受講ノートの分析による-」『早稲田日本語研究』21、早稲田大学日本語学会